

## 女性被虐待高齢者の虐待に対する心理と行動

キーワード：高齢者虐待、女性、家庭内、心理と行動

○石川麻美、三五成美、本間昭子  
新潟青陵大学

### I. 研究目的

高齢者虐待は平成 17 年に、「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」が制定され、その後、介護保険制度が導入され、サービスの充実が図られてきたが、虐待の相談・通報件数や虐待と判断された件数は増加している。本研究では被虐待者の約 8 割に当たる女性被虐待高齢者に焦点を当て、今まで共に過ごしてきた家族から虐待を受けることに対する心理や行動を明らかにし、虐待への介入方法を検討したい。

### II. 研究方法

1. 研究対象：CiNii で「高齢者虐待」・「家庭内」・「被虐待者」のキーワードで検索した文献から、女性被虐待高齢者の虐待に対する自覚の有無や虐待を受けることに対する心理や行動を論究している研究論文を対象とした。
2. 研究方法：被虐待高齢者の感情と行動に関する記述を抽出し、記述内容の類似性で分類し、その内容を反映したカテゴリーネームをつけ、システムを作成した。
3. 倫理的配慮：出典を明らかにし、書かれている内容を忠実に記載し、意図を正確に読み取る。

### III. 結果

文献検索の結果、14 件の文献を抽出した。文献は、アンケート調査 4 件、事例調査 10 件である。

論文をカテゴリー化した結果、【虐待を知られたくないという思い】、【虐待を受けることに対するあきらめ】、【他人に助けを求める】、【虐待者と共依存関係を築く】、【自責の念】、【家族や他人への遠慮】、【虐待への恐怖】が主なカテゴリーとして抽出された（表 1 参照）。

### IV. 考察

#### 1. 虐待を知られたくないという思いと行動

最も多く抽出されたのは【虐待を知られたくないという思い】であるが、『隠す』までの過程には様々な思いが存在している。虐待を『隠す』理由や被虐待高齢者の思いが、不鮮明であることも多い。また、隠されることで専門職者の介入が困難であり、プライバシーの問題などもあり、本人の同意がないと関わりの継続困難な壁が存在していると考えられる。そのため、現状や本人の思いを聞き、これからどうしたいのか、何をしてほしいのかを把握し、関係を継続することが必要であると考えられる。また、虐待者と被虐待者の関係を変化させるきっかけとして、住民との関わりがある。市民啓発として地域住民の虐待や介護への理解を深め、家族が孤立しないよう、虐待防止に必要な資源を住

表 1 女性被虐待高齢者の心理と行動

カテゴリー	サブカテゴリー
虐待を知られたくないという思い (30)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・虐待の事実を隠そうとする</li> <li>・虐待者をかまぼう・世間に知られたくない</li> <li>・虐待者への恐怖から虐待を隠そうとする</li> </ul>
虐待を受けることに対するあきらめ (20)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あきらめ</li> <li>・虐待に対して無反応</li> <li>・気がない</li> <li>・他人に助けを求めない</li> </ul>
他人に助けを求める (18)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他人に虐待の事実を訴える</li> <li>・援助を求める</li> </ul>
虐待者と共依存関係を築く (16)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・虐待者と共依存関係にある</li> <li>・虐待者に対する両面的な気持ち</li> <li>・虐待者に依存している</li> </ul>
自責の念 (14)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過去の自分の行いを責める</li> </ul>
家族や他人への遠慮 (12)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・居場所がない</li> <li>・遠慮している</li> <li>・存在価値がない</li> <li>・自分の価値が低い</li> </ul>
虐待への恐怖 (12)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・虐待者に対して恐怖を感じている</li> </ul>

民や介護者目線で考える機会をつくることも重要であると考えられる。

#### 2. 虐待への抵抗をあきらめる心理と介入

次に多かったのが【虐待を受けることに対するあきらめ】であるが『あきらめ』という心理にいたるまでには長期間の虐待や過去の家族関係などが関わっていると考えられる。そこで、一つの事例に対し関わる職種でカンファレンスを開き、対応する必要があると考えられる。それにより、専門職者が経験を積むことができ、対応についてもマニュアルを作ることができる。また、介入困難な家族を支援する方法として、「(略)調査や支援の実施は、虐待の疑いをもって当事者に知らせない方が受け入れられやすく、予後も良好だといわれています。」<sup>1)</sup> というように、専門職者が虐待のある家庭ではなく、困りごとを抱える家族として介入をすることで双方の介入への抵抗感も減少すると考えられる。

### V. 結論

女性被虐待者は、虐待に対し「知られたくない」や「あきらめ」の心理からの行動が多く見られた。介入が困難な閉じられた家族に対し、開かれた地域づくりや専門職者の援助技術を高めることが必要である。

#### 引用文献

- 1) 梶川義人. 高齢者虐待防止トレーニングブック. 34. 東京: 中央法規出版株式会社 2006.